

未知の分野への挑戦 ～水泳部だった私が野球部のアナリストに～

佐々木 勇哉 氏 (高校72期)

東京都東村山市出身
2017年4月 立川高校入学
2020年3月 立川高校卒業
2020年4月 慶應義塾大学法学部政治学科に入学
慶應義塾体育会野球部にアナリストとして入部



【立高時代のエピソード】

立高時代は水泳部と体育祭実行委員会に所属し、3年時に立高祭のクラス発表チーフを務めました。勉強、部活、委員会、行事と忙しい中で、効率的な時間の使い方を模索していました。具体的には、1週間の学習のTODOリストの作成とそれぞれの所要時間の管理です。地味なことだけれど目の前にあることを、毎日コツコツやり遂げる力をつける。高校時代にこの習慣を身に付けたことは今の自分の武器になっています。

【大学野球部でアナリストになった経緯】

2020年4月。私は慶應義塾大学野球部に当部史上初めて「アナリスト」として入部しました。大学でしかできないことに4年間没頭したいと考えたとき、真っ先に思い浮かんだのが野球部のスタッフ(裏方)でした。スポーツの世界で注目を浴びるのは当然ながら選手ですが、その裏には必ず多くの人の尽力があります。水泳部時代、双子の弟がマネージャーだったこともあり、裏方の重要性を感じていました。合格が決まりすぐに監督に面談を申し出ました。

「野球には『プレーする人』と『支える人』の2種類の人間が必要。選手の能力もちろん大事ですが、学生コーチ、マネージャー、アナリストなどの裏方が力を合わせて、1つの目標に進んでいく。それが学生野球の理想だと考えています。」堀井監督はこんな持論をもっている方です。この『支える人』の中にアナリストのポジションを新設したいというお話でした。小さいころから大好きだった野球に、選手でなくても勝利に貢献できる場所があることを知り、「ここで日本一を目指してチームのために力を尽くそう」と決心しました。

スタンドから動画を撮っている様子



撮影した動画を確認している様子
左: 佐々木勇哉、右: 善波力捕手(慶大・3年)

【現在】

現在のアナリストとしての仕事は対戦相手分析と自チーム分析で、私が軸を置いているのは後者です。具体的には、練習の動画撮影や打球や投球の詳細データの分析、フィードバックです。日々の活動で私が大事にしていることは客観的なデータから事実を伝えることです。これは選手自身の課題認識、目標設定をやっていく上で最初のステップである現状把握の上で重要な役割をしています。難しいと感じることは、全く足跡がないところに道を作るゼロから1にする大変さです。データの分野はまだ教科書もない。何が正解かはわからない。選手や監督をはじめとした指導者・スタッフとすり合わせをしていく中でしか目標には辿り着けないと思います。日々トライアンドエラーを繰り返しながら前進しています。そして、データ活用は選手のパフォーマンスを向上させる点で様々な未知の可能性が秘められている分野であるので、アナリストとしてどう分析しどう発信したら更に選手の能力向上に繋がるかを追求し続けたいと考えています。



手前: 佐々木勇哉
奥: 中澤慎太郎捕手
(2021年時4年)

【立高生にメッセージ】

私も日々心掛けていることですが、将来大きな決断をしなくてはならなくなったときの為に、今決断の練習をし続けるということです。現実突き付けられた課題にどう行動するか。小さなことでもいい、自分で決めて実行する。人から言われて無理やりやるよりも、自信や自己肯定感が高まります。そして大きな決断に直面した時に自分の決断に確信を持てるようになります。特にこれから進路を選ぶとき周りの人からの声が気になってどうすればいいかわからなくなり、投げ出したくなることもあるかもしれません。自分本意でない決断は必ずどこかで行き詰まります。自分自身で考え抜き、自信を持って決断できるようになるために、決断の積み重ねを続けてほしいです。